

風水害から身を守りましょう

雨の降り方と災害発生時の目安

雨の降り方から被害の予想ができます。雨の降り方に注意し、警報や避難勧告が出る前でも、危険と判断すれば、避難などの準備をしたり事前に避難したりすることも大切です。〔雨量は1時間雨量(ミリ)〕

<p>10~20 ミリ やや強い雨</p> <p>ザーザーと降る この程度の雨でも長く続くと注意が必要。</p>	<p>20~30 ミリ 強い雨</p> <p>どしゃ降り 側溝や下水、小さな川があふれ、小規模のがけ崩れが始まる。</p>	<p>30~50 ミリ 激しい雨</p> <p>バケツをひっくり返したように降る 山崩れ・がけ崩れが起きやすくなり、危険地帯では避難の準備が必要。</p>	<p>50~80 ミリ 非常に激しい雨</p> <p>滝のように降る(ゴーゴーと降り続く) マンホールから水が噴出する。土石流が起こりやすい。多くの災害が発生する。</p>	<p>80~ ミリ 猛烈な雨</p> <p>息苦しくなるような圧迫感がある。恐怖を感じる 雨による大規模な災害が発生するおそれ強く、厳重な警戒が必要。</p>
---	--	--	---	--

気象情報の種類と発表基準

特別警報が発表されたら、「ただちに命を守るための行動をとる」

注意報	災害が起こるおそれのあるときに注意を呼びかけて行う予報です。
警報	重大な災害が起こるおそれのあるときに警戒を呼びかけて行う予報です。
特別警報	警戒発表基準をはるかに超える豪雨等が予想され、重大な災害の危険性が著しく高まっている場合、最大限の警戒を呼びかけて行う予報です。

危険を感じたら早めに避難しましょう

町では、町内の公共施設等を避難所としており、本防災マップP8と町ホームページに一覧表を掲載しています。日ごろから最寄りの避難所を確認し、また、実際に避難経路を歩いて確認しておいてください。

また、災害時に避難をされる時は、動きやすい服装で最寄りの一次避難所へ避難してください。その際、自宅の電気・ガスの火元を確認し、浸水等の危険が無いが、周囲に十分注意し避難してください。暴風雨の夜間や道路冠水時など、どうしても避難行動が困難なときは、避難所等への移動は避け、自宅などの2階以上に緊急避難してください。

要配慮者の避難にご協力を!

介護を要する高齢者や障がいのある人は、特に早めの避難が必要となります。災害時に避難行動の支援を要する方々の避難については、地域みんなで協力し合い、安否の確認や呼びかけなど手助けをしましょう。また要配慮者の避難がスムーズに行えるよう、日ごろからの声かけや状態の把握など、地域ぐるみのご協力ををお願いします。



防災気象情報の段階的な発表

気象台が発表する気象情報	発令時の状況
大雨注意報	大雨による災害が起こるおそれのあるときに発表されます。警報になる可能性がある場合はその旨記述されます。
大雨警報	大雨による重大な災害が起こるおそれのあるときに発表されます。雨の期間、予想雨量、警戒を要する事項などが示されます。
大雨特別警報	台風や集中豪雨により数十年に一度の降雨量となる大雨が起こるおそれのあるときに発表されます。

警報の種類と概要

種類	予想される重大な被害	概要
大雨警報	がけ崩れ、土石流、地すべり、家屋の流失や浸水、道路や耕地の浸水や冠水、陸上交通の障害等	大雨による重大な災害が起こるおそれのあるときに発表されます。大雨警報には、大雨警報(土砂災害)、大雨警報(浸水害)、大雨警報(土砂災害、浸水害)のように、特に警戒すべき事項が明記されます。
洪水警報	家屋の流失や浸水、道路や耕地の浸水や冠水、陸上交通の障害等	大雨、長雨、融雪などにより河川が増水し、重大な災害が起こるおそれのあるときに発表されます。
暴風警報	家屋の損壊、農作物の損傷や落下、停電、陸上・海上・空の交通障害等	暴風により重大な災害が起こるおそれのあるときに発表されます。

特別警報の概要

種類	概要
大雨特別警報	台風や集中豪雨により、数十年に一度の降雨量となる大雨が起こるおそれのあるときに発表されます。

氾濫の種類

雨量の増加によってもたらされる氾濫には、川から水があふれたり堤防が決壊して起こる「洪水」と、街中の排水が間に合わず、地下水路などからあふれ出す「内水」の2タイプがあります。

洪水

大雨の水が川に集まり、川の水かさが増し堤防を越える。あるいは堤防を決壊させて川の水が外にあふれておきる洪水。氾濫が起きると一気に水かさが増しますので、最大の注意が必要。



内水

その場所に降った雨水や、周りから流れ込んできた水がはけきれずに溜まっておきる水害。川の水位が何mに達すれば警報を出すなどの対応が難しいため、注意が必要。



自動車による避難のリスク

自動車が冠水した道路を走行する場合、水深が車両の床面を超えると、エンジン、電気装置等に不具合が発生するおそれがあります。また、水深がドアの高さの半分を超えると、ドアを内側からほぼ開けられなくなります。

- 水深が床面を超えると、電気装置が損傷し、自動スライドドアやパワーウィンドウが動作しなくなるおそれ
- 脱出用ハンマーで割れる(合わせガラスは割れない)
- 水深がドアの下端にかかると、車外の水圧により内側からドアを開けることが困難となり、ドアの高さの半分を超えると、内側からほぼ開けられなくなるおそれ※
※内外の水圧差がなくなるまで浸水すると、内側からドアが開くようになります。
- 吸気口から浸水するとエンジンが停止し、再始動しなくなるおそれ(速度が大きいと浸水しやすくなる)
- マフラーから浸水するとエンジンが停止し、再始動しなくなるおそれ
- 水流がある場合、車両が流されるおそれ
- タイヤが完全に水没すると、車体が浮いて移動が困難になるおそれ